

第一〇章 民間信仰

信仰に関するものは、他章において直接、間接に取り上げられているので、ここでは多少の重複はやむをえないとしても、一応、他章において問題としている観点を離れて (1)主として、民間の俗信について、住民の心情生活における意義の面から取り上げ、(2)あわせて久万町内にある神社、仏閣に直接関係しない諸宗教の沿革及び現勢の概況についても触れることにする。

(1)については、文書、記録の類もほとんどなく、したがって実地踏査及び、各地域の古老との面談によって得たものを資料としている。幸いにしてごくわずかではあるが、非常に形が変わってきたもの、なくなっってしまったもの、滅亡の寸前にあるものなどに接することができた。

口述内容は、個々別々でその差はあるが、全体について大略を記せば、これらの古老が若いころ(あるいは子供のころ)に、①昔はこのようにしていたという話を聞いたことがある。②実際にしていたのを見たことがある。③実際に行った。④第二次世界大戦前までは行っていた。⑤昭和三〇年ごろまで行っていた。⑥昭和四〇年ごろまで行っていた。⑦現在も昔のまま行っている。⑧方法は多少変わったが現在も続けて行われている。と分けた場合、①②③に該当するものが最も多かった。したがって、この章では概略一五〇年くらい前までは確実にさかのぼり得るものであるが、現況ではない。はなはだ流動性を含んだものである。

資料は、個人の生活及び村落共同体、あるいは家庭、あるいは産業に

従事する日常生活全般と密接に結びついた事象ばかりである。そこで、ここではまず、各地区に共通の宗教的行事(年中行事)についてその相違点に注意しながら順に記述し、ついで、同じく各地区共通の行事ではあるが恒例の年中行事とは言いがたいものを挙げ、その異同をみていくことにする。更にある地区にのみ伝承されているような宗教的行事、及び信仰形態を取り上げて、その沿革についてもできるかぎり触れていくことにする。

なお、資料の分類、整理に当たって注意した点は、ア、各部落共通のものについて考えられる特色はないか。イ、仏教系、神道系といった性格の特色がみられるか。ウ、地形的にみた閉鎖性を持っているか。エ、産業構造上の特色が認められるか。オ、旧久万町について門前町、宿場町といった特色が認められるか。等である。その結果、宗教的行事のほとんどが部落単位になっていること、また、年中行事が大半であること等がわかったのであるが、これらはいずれも久万町全体としての地域的態様といったものであり、住民の生活意識に根深く食い込んだ信仰感情において共通に認められる特色といったものである。


一 信仰形態

1 共通性を有する信仰

地区名	形態	念仏の口開	日待ち祈禱	麦祈禱	雨乞い	虫祈禱	山の神祭り	盆	巡拝者への接待
久万	身祈禱として、組の中七人ほどが回り持ちで当番となり、米二合半を持ち寄り、念仏を唱え念珠を繰って身体健全を祈る。	三月に組中の者が二合半の米を持ち寄り、念仏を誦し、版木で守を作り畑に立て祈願をする。	組全員で椀の木の竜神に雨をもらい受けに行く。	鱒淵で松明に火をつけ、鐘や太鼓を鳴らしながら田畑を回って老人ホーム前の川に流して虫送りをした。	正月一六日までに馬頭寺で行った事もあったが、以前は大宝寺から出向き祈願祭り、塔婆供養した後、野尻地区山頂の「山の神社」に行ってきた。	盆踊りをした。入野地区は高山寺に行き、念仏や「オイネーオンメーミンドーワー」と唱えながら先祖供養を行った。	有志によって、巡拝者の盛んに来る季節に行った。		
野尻	正月一六日お宮で念珠を繰り、中で太鼓をたたきながら念仏を唱えた。 馬酔木谷は、旧正月一六日までに神社から行き、組日待ちをする。 他は有志の家のみ戸別に行う。各戸に祈禱の守り、組境道に関札(守り)を立てる。	彼岸前後に種麦を持ち寄って念仏を唱え祈願をした。	小学校下「竜の口」や椀の木の竜神に雨乞いに行った。時には泊まりがけで宇和島方面の竜王神にも雨乞いに行ったという。	大谷橋で松明に火をつけ、法螺貝を吹き鐘や太鼓をたたきながら、三晩続けて三通りの道を通り、三島神社御旅所下の川に流して送った。	正月一六日までに馬頭寺で行った事もあったが、以前は大宝寺から出向き祈願祭り、塔婆供養した後、野尻地区山頂の「山の神社」に行ってきた。	昭和の初めごろから大師講を結成し、春の季節に、遍路道や大宝寺で食物、品物の接待を行った。			
菅生	各組ごとに会堂で大宝寺、三島神社(昭和になってから)に出向き祈願する。各	春彼岸に堂に集まり念仏を唱えた後、版木札に「奉修百万遍念仏祈願」と書きそ	第一段階、各戸から酒料を集め各組の宮堂に籠り念仏を唱える。	組々が松明に火をつけて、法螺貝を吹き鳴らし、鐘をたたきながら田畑を回り川	組々に祀り、特に北村では一般に「大宝さん」と呼ばれる宮で盆の一六日・大山	宮ノ前薬師堂において、旧七月七日大宝寺から出向き組施餓鬼を行った。槻組は	各戸が遍路道、大宝寺で食物、品物の接待をし、善根宿も行った。		

地区名	形態						
楨谷	念仏の口 <small>くち</small> 開 <small>ひら</small> き 日待ち祈禱	戸に守りを渡し、組境に関札を立てる。鬼の金剛には弁当、箸をつける。	れを畑に立てる。	に流す。	鎮めの祈禱を行った。その鐘太鼓が残っている。	旧七月七日大宝寺に代表が行き、施餓鬼旗（五如来旗）を書き回向をして貰ったのを持ち帰り組中で祀って施餓鬼をした。	巡拝者への接待
明神	正月一六日までに祈禱し、鬼の金剛は正月七日までに吊るす。		第二段階、各組から代表が三人ずつ出て久万町樅の木の竜神に水を乞いに行った。ある時は、御神体を持ち帰ったりした（菅生中道）。第三段階大野が原竜神社に行った。	松明に火をつけ田畑を回って川に流す。	各人が祀り、旧七月九日の赤迫の山の神を盛大に祀った。	高山寺において夏祈禱をし、境内では念仏踊り、子供相撲を行った。旧八月一五日武田天堂で観音縁日として温泉郡、伊予郡から来て奉納相撲を開き参集客、相撲取りのための宿まできた。高山、皿木では一四日に相撲が開かれ相撲宿もできた。	各組に大師講を組織し、講で「小豆飯」「寿司」「餅」「草履」「わらじ」などを作って、道端の家を借り、各当番が出て接待所を設け巡拝者の奉仕を行った。
楨谷	旧一月一四日、会堂で東光寺（美川村七鳥、大宝寺末寺）より出向き十六善神を祀り、大般若経六百卷を誦し、その経典	寺や神社の「作守」を立て祈願を行った。	曾我神社で祈禱した後、阿弥陀が森に登り石鏡神社に向かって祈願し雨をもらい受ける。	六月下旬から七月上旬にかけて、お宮で般若心経千巻と祝詞を唱えた後、松明に火をつけ、鐘、太鼓、鉄砲を鳴らしながら	各人が祀り旧七月九日の赤迫の山の神を盛大に祀った。	観音堂で盆の七日、一四日に地域全体の人々が集まり念仏を唱えて施餓鬼を行う。	善根宿、食物の接待をそれぞれ行う。

上直瀬	大般若経を誦し、鬼の金剛を吊るす。	畑野川	寺から出向き、大般若経を誦し、鬼の金剛を組境に吊るす。関札を渡される。	父二峰	各組ごとに寺から出向き、十六善神を祀って大般若経を誦し、鬼の金剛を組境に吊るす。寺から守りと、関札を渡される。一六の弁当に箸を付け鬼の金剛につける。二〇日まで落ちるとその年は縁起が悪いとされた。		入りの箱を組中持ち回る。当番の家では餅をつき各戸に配り組で作った鬼の金剛を当番の家から川を渡して吊るす。寺から大般若経の守りと、関札を渡される。
					春彼岸に寺で祈禱をした守り札を貰って、それを持って畑を回り祈願をする。		
	石墨神社に籠り念仏を唱える。		竜王神社に籠り、鐘太鼓をたたき念仏を唱え、団扇を上げ下げしながら念珠を繰って祈願をする。また各竜王神を川淵にまつり祈願をする。		二名地域、桂ヶ森中腹にあるおかめさんに行き、瓶の中の水を持ち帰る。		
旧七月二八日に、神興や、大般若経のは					八月に日を選んで松明に火をつけ鐘、太鼓を鳴らして地域を回り川下に流す。		田畑を回り川下に流す。虫の多い年に行われた。
					各小組ごとに祀りそれぞれが祭日を定めていた。		
明神駄場の長慶天皇祭として、旧七月一	善通寺にて旧七月一三、四日地域の人々が集まり念仏や「オイネー、ホンマー、ミンドーワ、ナムアイミンドーワ、ノメードホイ、ノメードホイ」等唱え施餓鬼を行う。		玉泉寺庵、十一面観音を祀り、大正から昭和初年にかけて庵主（岡田長憲）が、旧七月七日先祖に念仏を唱え供養をする。				
			大師講を作り、毎月二一日各家庭会場を持ち回り、接待は戸々に行った。		遍路道において各戸が食物、品物の接待をし、善根宿を行う。		

地区名	形態
下直瀬	 <p>念仏の口開</p>
	<p>日待ち祈禱</p>
<p>二月一日、各組の有志が集まり念仏を唱える。</p>	<p>麦祈禱</p>
<p>竜神に二夜三日籠り、鐘、太鼓をたたいて百万遍を唱え祈願をする。</p>	<p>雨乞い</p>
<p>八月、神輿をかつぎ回る。</p>	<p>虫祈禱 <small>いった経箱を若衆がかつぎ組中を回る。</small></p>
	<p>山の神祭り</p>
<p>旧七月一日、地藏堂で組の人々が、ロソク二本、酒一合を各自持参し、念仏を唱えて組施餓鬼を行う。併せて明神駄場の長慶天皇菩提のために、百八灯を奉</p>	<p>盆 <small>五日各組（永子・段・中組・下組）からそれぞれ幟を立て、鐘・太鼓・法螺貝・松明を揃え「なむあみだ」と口々に唱えながら組中を練り歩き、浄福寺に集合して供養塔のある明神駄場にむかう。明治一五年ごろまで行い、最近では、幟のみ立てて供養の形をとどめている。念珠や鐘が残っている。 千手観音を祀る観音堂に、一五日に組中の者が集まり念仏を唱えて、盆踊り等を行った。</small></p>
<p>古岩屋に、地域で集めた品々を持ち寄り、ふたりが当番となって巡拝者への接待をした。もし巡拝者に病人が出た場合は、小屋を造り、ふたりが食事等を運んで養</p>	<p>巡拝者への接待</p>

備考	
<p>これは、十六善神、日天、月天を祀り、大般若経六百巻を誦し、念仏を唱えて一か年の組中安全、風雨順時、五穀豊穰を祈願するものである。組員こぞって参加し祈願してそれぞれが大般若経の守りを受け、すべての組境には関札という組中安全を祈願する守りが立てられる。あわせて藁で作った鬼の金剛が組境の道を渡して吊るされた。それには、十六善神への弁当までが添えられた。(菅生・父二峰) 現在はほとんど見ることなく関札のみである。</p>	
<p>久万地区は仰西翁の水路のため、水の心配は他の地区ほどではなかったらしいが、大部分は高い山の頂上にて焚火をして祈願をした。特例として明治初年大雨乞いが行われた。稀な異常干魃のため口番の農民ごとくが大宝寺に集まり、全裸体で蓑笠をつけ、腰に荒布(荒雨の意)を巻き付けフリマラ(降子の意)で千人踊りをしたと言う。</p>	
<p>虫の多い年に行われ、暗くなつてから組ごとで行つた。</p>	
<p>この祀事は、山仕事をする者が、正月・五月・九月の二八日に悪魔悉退の不動明王縁日にちなんでまつたものである。</p>	
	<p>納した。翌日は念仏を唱えて仏送りをした。薬師堂で念仏を唱え盆踊りをした。また明治四〇年ごろからは相撲をとつていた。</p>
<p>江戸時代から昭和一〇年ごろにかけて三、四月には、日に三、四〇〇人前後の巡拜者が列をなした。各地においては個々に、あるいは集団で、競つていろいろなものの接待をし、宿の提供をもした。</p>	<p>生をした。死亡した時は、夜は三人、昼は二人でとぎをし、役場に連絡をとつて処置をした。これら一切を、組長が責任者となつて行つた。</p>